

君が好きだから

M i k a 3 S h i b o

井上美珠

M i j u I n o u e

termity



エタニティ文庫

C o n t e n t s

| | |
|--------------------------|-----|
| 君が好きだから | 5 |
| Happy Wedding | 203 |
| 君と見合いをするまで | 265 |
| 書き下ろし番外編 あなたが帰ってこない日は | 305 |

君が好きだから

二十九歳になって、そろそろ結婚しなければならぬ年齢になって。

そして思うのは、早く手を打たないと、子どもだつて三十過ぎにしかできないから、という変な心配。

誰もが焦る年齢になって、美佳も本当に焦った。

けれど手を打つのは簡単ではない。

だから待つていたつて仕方ない、と思ひ安易にお見合いを引き受けた。

お見合い会場にあらわれた相手は、自分にはとてもとても不釣り合いな方で、即行断られるものだと思つていた。

「僕と結婚しませんか？」

断られなくて、こちらも断らなくて。そして何度か会つて、自然と話せるようになって。縁談が進んでいた。

棚からぼた餅？ それとも、待てば海路の日和あり？
「どうしてですか？」

自分が質問し返した言葉に対して、にこりと笑つた相手に、ドキリとする。どこか高貴さが漂う、黒い髪と黒い目。凛とした感じで、立ち姿も絵になる人。育ちが良さそうな雰囲気と、程よく筋肉のついたスタイルのいい身体で、美佳は直感的にこの人きつとモテる、と思つた。

「君が好きだからに決まってるでしょう」

照れたように崩れる表情。口元に当てた大きな手。

じつと見ていたら、彼は穏やかに笑つてこちらを見た。

すごく好きとか、この人でなくてはならないとか、そういう考えはなかった。ただこの人だつたらいいかな、という思ひで承諾した。

先のことなんてあまり考えずに、首を縦に振つて、そして結婚式を挙げたのは、その四ヶ月後。

スピード婚なんて、流行にのるつもりはなかったけれど「君が好きだからに決まってる」という言葉が胸に響いた。

「おはよう」

新聞片手に寝癖頭で起きてくるのは当たり前。それを直しながらテーブルについて、腕時計をはめるのが日課らしい。寝癖はすぐに直る髪質らしく、羨ましいと美佳は思う。「おはよう」

ご飯を茶碗に盛って、味噌汁をよそって、卵焼きを皿にのせる。今日はジャコ入りの卵焼き。新聞をテーブルに置いたままボートとしているその人の前に、その三つを置く、ようやく顔を上げた。シャツにスラックス、ネクタイはまだしていない。コンタクトを入れていないその目には、眼鏡が装着されている。

普段はコンタクト。眼鏡は嫌いだと言うが、休日は大抵眼鏡で過ごしている。そこまですぐ目が悪いわけではない、と言っているが、右目が1.0で左目が0.2。差がありすぎるため、コンタクトや眼鏡をしていると、初めてのデートのとき言っていた。右目は乱視が強く、コンタクトはその矯正のためであることも、同じ日に聞いた。

「紫峰さん、コンタクトは？」

「今、入れる」

眠そうに目をこすって眼鏡を外すと、小さなケースから、洗浄液に入ったコンタクトを取り出す。

前の席に座って味噌汁を飲みながら、ごく小さいコンタクトを入れる様子を見る。直径一センチにも満たないようなそれが、目の中に入るといふことにすごさを感じる。周りの友達も、今まで付き合った人も、視力がよかった。だから、美佳にとってこの仕事は新鮮だ。

「よく入るよね、コンタクト」

「そうかな。慣れてるから、難しいことじゃないけど。美佳も入れてみる？」

「痛そうだもん」

「痛くないけどな」

両方の目に入れ終わると、何度か瞬きをする。自分を見る目が変わったことで、今はクリアに見えているのだと感じる。

「美佳の今日の予定は？」

「今日？ 出版社に行って、原稿を出してくるだけ。打ち合わせをして、すぐ帰ってくると思う」

堤美佳から三ヶ嶋美佳になって三週間。語呂のよさが、どうにも笑える名前になった。三週間前に夫となった人は、三ヶ嶋紫峰。美佳の仕事は、翻訳家兼小説家。翻訳はフラ

ンス語と英語が専門。小説は遊びで書いたのがまあ売れて、翻訳家という肩書きもあつたせいか、注目を集めた。小説家としての仕事量をあまり多くしないようにしているので、契約しているのは一社だけだ。印税はそこそこ入ってくるし、あまり外にも出ない。こういう職業のせいか結婚なんてものは縁遠かった。父は早世していないが、娘を心配する母親がいる。その大切な母が初めて持ってきた見合いの話。普通は写真くらいあるものだ、と思つたけれど、それすら見せずにゴリ押ししてきた相手。それが、三ヶ嶋紫峰だった。

『見なくていいって。きつと、気に入るから』

相手もこつちを気に入らないといけないんだよ、というのは言わないで置いて、母に勧められるまま見合い相手と会つた。二十九歳にもなるのに、赤い振袖を着せられて、恥ずかしい思いをしながら席に座つたのを覚えてる。

「今日、僕も早く帰つてくると思う」

「え、本当？　じゃあなになが食べた？」

「美佳が作つてくれるものなら、なんでも」

美佳が作るものならなんでも食べる、といつも言う。かえつて悩む、ということも紫峰は知らないのだろう。しかもそれが、言われたこちらが、照れてしまうような台詞だ

ということにも気づいていないようだ。

昨日の帰りはちよつと、というか、ものすごく遅かつた。ベッドが揺れたなあ、と思つて目を少し開けて時計を見ると、午前三時だった。気遣うような紫峰の視線を感じて、そのまま寝たふりをしていたら、サイドランプが消えて横になる気配を感じた。すぐに聞こえてきた寝息に、日々の疲れを感じる。きつそうだな、と思ひながら眠りに落ちた。そして、今は午前七時半。いつも紫峰は七時に起きて身支度をする。四時間くらいしか寝てない。

「早く帰ってくるなら、ゆっくり寝れるね」

「そう、美佳とゆっくり寝れる。明日は非番だし」

一瞬、箸がとまる。おいおい、と思う。

そんな台詞はベタな恋愛小説とか、少女漫画とか、そういうものでしか聞かないもの。本の中では、ヒロインがかなり愛されて、そしてお前が食べたい的な台詞を言われることがある。今まさに同じようなことを紫峰から言われている自分は、愛されヒロインじゃないか、と思つた。

「結婚式のあとから、三週間近く美佳と寝てない。君も仕事、僕も仕事。君も不規則、僕も不規則。今日はできるでしょ」

淡々と言われて、そうでしたね、と思うしかない。しかし、今日はできるでしょ、は露骨だ。結婚前後に一度ずつ夜を過ごしたけれど、それ以来していかない。結婚前に初めてしたときは、こんな風にされたことあったっけ？ と驚くくらいだった。男の人にこんなに愛されたのは初めてだ。

優しく、ときに激しく愛されながら、ここまでしてもらえらるほど美人でもないし、スタイルもよくないですよ、と途切れ途切れの意識の中考える冷静な自分がいた。ややふくよかな身体つきが美佳のコンプレックスで、結婚前にダイエットして、ウエディングドレスを着た。少しきつめのサイズを選んでいたからちよどよかったのだが、結婚式後、紫峰からは文句を言われた。

『美佳、ダイエットは禁止』

『はあ？』

美佳の柔らかい身体が好きだから、と翌日紫峰は言った。それを聞いて、かなり恥づかしかったというか、照れたというか。痩せた女性が好きだ、という人が多い中で、自分の身体を好きだと言ってくれてよかったけれど。

「紫峰さん、私とそんなにしたいの？」

「したいよ」

「どうして？」

どうしてって、と少し照れたように次の言葉を続けた。

「君が好きだから」

他の人が聞いたら顔が引きつるよ、と美佳は思う。

なにがどうしてこんなに愛されているのかわからないけれど、紫峰と結婚してよかったと思う。美佳は本気で紫峰を好きだとか、そういう気持ちで結婚を決めていない。だがここまで言われると、心も引きずられてくる。

紫峰は、魅力のある人だし、きつとモテる。男三人兄弟の次男で、父親は警視総監も務めたことのある人。兄も弟も警察官。同じく紫峰も警察官で、今は警備部警護課、というところにいる。それがいわゆるSPと呼ばれる人達だということを、結婚直前まで美佳は知らなかった。

そんな堅い職業一家なのに、三ヶ嶋家はみんな気さくで大らかで、逆に美佳が驚くほどだった。これまで通り仕事を続けなさい、と紫峰の父親は言ってくれ、母親はサインがほしいとねだり、兄にいたっては本が全部ほしい、と言った。警察の階級はよくわからないけれど、紫峰の兄は警察官の中でもかなり上のポジションにいるらしい。紫峰は警部という階級らしいが、今でも美佳にはどんなものかわからない。

「そろそろ行かないと」

紫峰が立ち上がり、食べ終わった茶碗をもって台所へ行った。

「そのまま置いてて。私、片づけてから行く」

「うん。いつもありがとう」

紫峰は自室へ行き、ジャケットを着てネクタイを首にかけてリビングに戻ってきた。

警察手帳をテーブルにおいて、ネクタイを慣れた動作で締める。最後に警察手帳の中身を確認して、ジャケットの内ポケットに入れた。

「美佳、出版社まで気をつけて。僕は行ってくるから」

自分が先に出かけるというのに、紫峰は美佳の心配をする。結婚前からそうだ。紫峰と会った翌日に遠出をするのだと言ったら、気をつけて、と二回も言われた。

「うん、行ってらっしゃい」

見送りをと思い、玄関までついて行く。朝はなるべく見送りをしたいと思っっている美佳だったが、最近は何もままならなかった。原稿の締め切りが近く、すれ違いの生活が続いていたが、今日は久しぶりに見送りができた。

「美佳」

靴を履いた紫峰が美佳の頬に手をやった。大きな手は、美佳の丸い頬を完全に包み込

む。そのまま顔が近づいてきて、唇を重ねられる。軽く唇を挟むようなキスを二回されて、唇が離れた。

「早く帰ってくるから」

そのままドアを開けて出て行く背中を見送って、ドアに鍵をかける。

「ただだけー」

某メイクアップアーティストのまねをしながら、顔が熱くなる。

本当に、自分はどれだけ愛されヒロインなんだ、と思う。まさか自分がこんなに愛されるとは思っていなかった。でもなんだかこれはすごく嬉しい。

「結婚してから本気で好きになるって、どうなんだろう」

そのまましゃがみ込んで、熱い頬をパシパシと叩く。おまけに今夜のことを考えるだけで、悶える感じ。そして、悶えていると、急に冷静になるのは毎度のこと。

「紫峰さん、どうして私のこと好きなんだろう。どうして結婚したのかな」

普通の家の、普通の人間。首を捻っても、わからない。

どうしてですか、と聞くたびに、いつも返ってくる答えは決まっているのだ。

『君が好きだからに決まってる』

それだけで満足しないのが女の性なのか、どうにも納得できない自分がいた。

どうして、という気持ちが消えないのは、平凡な自分が愛されヒロインになったからだろう。

2

「よう、新婚さん」

「やあ、離婚さん」

「お前、相変わらず性格悪いな」

「お前に言われたくないね」

拳銃を片手に持ち、ガチツという音を立てて、拳銃にセーフティロックがかかったことを確認する。そのままホルダーへ入れると、相手も同じくホルダーへ拳銃をしまうところだった。

「三ヶ嶋、お前奥さんとうまくやってんのか？ 最近毒吐いてばっかじゃねえか。結婚したんだから、ちったあ丸くなれよ」

思い当たることはあった。けれど、いつも毒づいているわけじゃない。最近毒を吐い

てばかり、というのは訂正して欲しいと紫峰は思う。だが昨日のことを相手はよく覚えていた。

「丸く？ なったと思うけど」

「まあなあ、確かに前よりは……いや、だからさあ」

「だったら、松方が言えればいい。新人の松井はお前に懐いているじゃないか」

「俺が言う前に、係長のお前が呼び出したじゃないか。君にできることは、要人の壁になるだけか？ なんて言うから、マジにビビってたぞ。お前に慣れてないんだから、少し柔らかく言ってやれよ」

同期で同じ警備部警護課に配属された松方裕之は、最近離婚したばかりだった。円満離婚だったので、深刻な問題を抱えているわけではない。松方は大きな身体と、優しそうな垂れ目が印象的な人のよい男だ。容姿に似合った面倒見のいい性格で、後輩からの信頼もあつい。

「ふくよかで可愛い美佳ちゃんに、慰めてもらえ。独り身じゃできないことだぜ。夜の営みは忙しい勤務のストレスにも効く……って、おい、やめろよ」

口を閉じろという意味で、紫峰は銃口を松方に向けた。が、ふりだけで、すぐに拳銃をホルダーにしまう。

「美佳のどこを見てるんだ、お前」

「胸？ デカイよなあ。ああいう感じの胸に抱かれてみたいぜ、どんなんだよ？ 独り身は寂しいからな……って、痛えよ、拳固げんこかよ」

力加減をしつつも、拳固で頭を殴った。悪気はないのだが、松方はたまにこうやって美佳のことを揶揄する。

「独り身で溜たまつてるからって、人の妻の胸を見るからだ。腰掛け婦人警官なら、喜んでお前についてくると思うけど。美佳と同じ名前の、あの腰のデカイ婦人警官、なんて言ったかな？ 本人はスタイルがいいって、思ってるらしいけど。デカイだけに、まさに腰掛けって感じ？」

「……お前、本当に溜たまつてるな、三ヶ嶋。毒が効いてるぜ、とくに今日は」

言われてうんざりしたため息を漏らす。当たり前だ、とどれだけ言いたいのか。

「結婚して約三週間。新婚旅行は要人警護でまだお預け、それに当直と美佳の仕事が重なって、すれ違い。溜たまるに決まってるだろう。それなのに、松井は宮田みやた大臣にクレームつけられるし。なんでクレームつけられたか知ってるか？」

「いや」

「秘書が電話を渡そうとしたのを、ナイフと勘違いしてねじ伏ふせたんだ。SPは要人を

守ることも大切だが、それ以外にも状況判断能力が求められる。大臣はかなり立腹して、なだめるのに苦労した。その上、岡野おかの課長に松井と一緒に呼ばれて説教。松井に始末書を書くよう指示したら、なんで自分が始末書を書かなきゃならないんですか、とほざく」

松方は、それは災難だったな、と途中相槌を打ちながら同情するような顔つきで頷く。「だから言ったんだよ。始末書を書くのは要人警護についてまわる仕事だ。それができなくてこれからここでやっていけるのか？ 始末書も書けないような体力だけのSPが、って。僕が言い過ぎていいのか？ 松方が新人の松井のほうをかばいたいなら、僕の文句でも一緒に言っていればいい」

わかったよ、と松方は、髪をかき上げながら引き下がる。百七十九センチの紫峰よりも、十センチ背の高い松方に怒っていると、まるで、大きな犬をしつけているみたいだった。

「今日は誰の警護たごだ？」

気を取り直した松方に聞かれて、それに答える。

「大岩おおいわ元総理。お忍びで病院へ診察」

「へえ、年だしなあ。長くないんじゃないの？」

「知らないね。とにかく今日は早く帰る。面倒なことも起きないだろう。相手は老いた

松方に背を向けながら紫峰は悪態をついた。

「お前、本当に口が悪い……美佳ちゃんの前でもその調子なのか？」

「そんなわけないだろう。だいたい、美佳にこんなことを言う機会がないね」
大事にしてんだな、と言われて、当たり前だと心の中で呟く。

「しかし、なんで俺は要人警護になんてなったんだろうなあ。毎日疲れるぜ」

「憧れていたんだろう？」

訓練生の頃、松方はSPへの憧れを熱く語っていた。あの頃、松方は結婚していて、とても幸せそうだった。結婚はいいぞ、と言っていたのに、紫峰の結婚が決まった頃には、やめておけ、に変わっていた。それに対して苦笑を返しただけだが、その目は真剣だったことを思い出す。

「三ヶ嶋は、どうしてSPになったんだ？ 家は警察一家だし、東大出なのに、どうしてノンキャリアだ？」

別に、どうして、ということにはなかった。まだ世間に普及していないSPをやってみたかった、それだけだ。

「前に言っただろう？ SPをやってみたかったんだ」

まあなあ、と同意する松方に、紫峰は笑ってみせた。

「それよりなにより三ヶ嶋が結婚したことのほうが驚きだったよ。お前ってなんか、生活の匂いがしないっていうか、女はいるだろうけど、結婚はしないと決めた。クールで、おまけに毒舌家だし？ ついてこれる女っているのかな、って感じだし」

松方とこんなに話すのは久しぶりで、そして紫峰が結婚するとは思わなかった、と聞くのは初めてだった。

確かにそうかもしれない、と紫峰は思う。外見だけでなく、職業を明かしたりしても、自然と女はやってきた。結婚まで女関係がなかったとか、そういうことは一切ない。美佳と見合いをしたときだって、付き合っている彼女がいた。背が高くて上昇志向の強い、警察のキャリア組。洗練された美しさが気に入っていた。

その彼女と結婚も考えていた。付き合ってから二年。相手から催促されたのもあるが、好きという気持ちももちろんあって、そろそろプロポーズでも、と思っていた。プロポーズの言葉も用意していて、いつ言うかということも考えていた。

そんなときに、父から、世話になった人の娘と見合いをしろ、と言われた。その人は父がまだ独身の頃に、初めて配属された場所での先輩、ということだった。そのノンキャリアの先輩という人は早世して、妻と嫁にいない末娘が二人で暮らしているとい

うことだった。一度会えばうるさくないだろうという気持ちから、その娘と会うことにした。

見合い前日に、紫峰は付き合っている彼女に会って、抱き合いながらことの次第を話した。今でも、最後に抱いたときの腰の細さと、よがる声を覚えていいる。その彼女に、しよがないよ、一度会ってくれば？と言われて翌日、見合い相手、美佳に会ったのだ。

「警視の中村瞳子を振ってまで美佳ちゃんよ、とはね。中村瞳子って美人で才女だろ？おまけにスタイル抜群。どこが悪かったんだ？見合いの前日、会ってたって聞いたぜ？」

よく知っているな、とそのニヤついた顔を少しだけ睨みつける。

「瞳子は結婚してもいい人だった。けど、美佳は結婚したい人だった。それだけの違いだ」

「なんでそう思っただよ」

食い下がる松方に苛立ちを覚えた。

ただでさえ、溜まつているというのに。

「松方、さつき溜まつてるんだらう、って聞いただろ？」

「ああ」

「実際、美佳と会えなかったり、してなくて溜まつてることは事実だ」

顔つきが変わったのは自分でもわかる。松方の引いたような表情を見ても明らかだ。

「そんな僕を苛立たせるなよ。ミスしたらどうする」

松方は、わかった、と言ってそのまま口を閉じた。その横を通り過ぎると、松方はもう追いかけてこなかった。

松方は気のいい奴だが、ときどき余計なことを言う。

「係長、今日もよろしくお願いします」

昨日、指導した松井が丁寧に頭を下げた。

「昨日みたいなこと、するなよ」

その肩を叩いて、フロアを出る。警護対象者宅へ行く時間は迫っていた。足早に進むと、そのうしろを松井がついてくる。

「昨日は言いすぎた、悪かった」

松井は焦ったように返事をする。

「いえ、そんなことは」

それを聞いて、小さくため息をつく。

ふと美佳の顔が思い浮かぶ。少しだけモヤモヤしたものが晴れた。美佳と結婚をした理由は、なぜかこの人と結婚するだろうと直感的に思ったからだだった。

警護対象者宅へ行くための車に乗り込むと、仕事に対するストレスを紛わせるために、初めて美佳に会った日のことを思い出した。見合いをした日、付き合っていた瞳子にも、これまでの恋人達にも感じなかったものを彼女に感じた。それは、運命というもの。

美佳は今まで自分が付き合ってきた女と比べれば見た目は平凡だ。けれど会った瞬間に惹かれた。小説家だと聞いて、その日のうちにすべての本を買って、そしてそのすべてを読んだ。平凡な外見とは違う、深みを感じる小説だった。紫峰は、外見とその人の本質は違うのだと、このとき強く感じたのだ。文章表現の美しさは、自分にはまったくない感性だった。そんな美佳に感じたのはたつたひとつ。もしかしたら気づかないで通り過ぎるような、第六感的なもの。

『きっと僕は、この人と結婚するために生まれてきた』

そんなロマンチストみたいな考えを持つのはおかしい、と何度も紫峰は自分に言い聞かせた。たつた一度会っただけなのに、バカバカしいとも考えた。しかし、美佳は言ったのだ。互いの親がいないとき、二人きりになったときだった。

『こうやって会ったのもなにかの縁でしょうけど、他の方がいらっしやるのなら、どうぞそちらへ行ってくださいね』

丁寧な言葉と、首筋に注がれた視線。苦笑されて、思わず首に手をやった。美佳と見

合いをする前日、紫峰は付き合っている彼女と会った。その彼女である瞳子がキスマークをつけたのはわかっていたが、これくらいなら多分見えないだろう、と油断していた。思わず手をやった自分の動作にも、美佳は動じることなく笑みを向けた。

意外に鋭い女だということに心奪われた。そして嫌味に聞こえない丁寧な言葉で指摘され、美佳の前にいるのが、とても恥ずかしかった。そんな状況にもかかわらず、美佳の言った「なにかの縁」という言葉が紫峰の耳に残っていて――

「あの、係長」

不意に松井から話しかけられて、顔を向けた。

「奥さんの美佳さんって、どんな人ですか？」

「どうしてだ？」

そんな質問を受けるとは思わなかった。きっと松方がなにか話したのでだろう。

「松方さんが、係長にしては意外な相手だけど可愛い、と言っていたので」

聞いてみたいと思っていた、と言葉を繋ぐ。余計なことを話すな、と思うのが可愛いということには紫峰も同意するので、ため息をつき、口を開いた。

「一言で言うと、女らしい人だよ」

丁寧な言葉と、女らしい胸も腰もある身体つき。おまけに教養深く、小説家だけあつ

て知識も豊富。華道も茶道も一通りこなす。習わされていた、という割にはかなりの腕前だ。しとやかだけれど、きちんと仕事を持って自立している美佳は、女の中でも輝いて見えた。

「従順な感じですか？」

「いや、きちんとした仕事を持って自立している。収入は僕より多い」

「係長よりですか？」

「そう。すごいだろう？」

松井の反応に紫峰は満足した。

美佳はすごい、いつも思う。紫峰に運命を感じさせたこともそうだし、小説家としてかなりの収入を得ていながら、誰かにそれを自慢することもない。

美佳が紫峰のことを好きで結婚したわけじゃないことは、紫峰もよくわかっている。出会って二ヶ月、結婚するまでに二ヶ月。たった四ヶ月の付き合いで、すべてを好きになれとは言わない。美佳が紫峰との結婚を承諾してくれただけでも、紫峰にとっては嬉しいことだった。今はまだ愛されるということになじめていないようだが、それもきつと時間が解決してくれると思う。

美佳のことを考えているうちに目的地に到着した。知らずため息が出る。

仕方なく紫峰は、彼女のことを頭から追い出す。美佳のことを考えると、そのことで頭がいつぱいになり、仕事に集中できないからだ。

車から降り屋敷に入ると、要警護者の大岩元総理は、すでに玄関で待っていた。

「やあ、三ヶ嶋君、待っていたよ。今日はよろしく頼む」

七十一歳、今も政界に影響を及ぼす、女好きの政治家。初めて警護したときから、ずっと指名されているのは喜ばしいことなのか。

「こちらこそよろしくお願ひします」

頭を下げると、いつもの笑みを浮かべる。仕事用の顔は、いつも同じだ。

仕事中に女の顔が浮かぶことなど、今までなかったのに、つい美佳の笑顔を思い浮かべてしまう。

美佳と出会って結婚してから、仕事にこれまで以上に専念するようになった。美佳を心配させないためには、集中して職務にあたる必要があると思っただからだ。

「聞いたよ、三ヶ嶋君。結婚したんだって？」

兄弟の中で君が最後だったから、父上は嬉しかっただろうねえ」

「ありがとうございます」

松井が不思議そうな顔をしていた。紫峰は自分の父が元警視総監であることを、ほと

んどの人に言っていない。警備部警護課の中でも知っているのは、課長と松方だけだ。「どんな人か、今度会わせてほしいもんだねえ」

「都合が合いましたら」

当たり障りのない返事。それに満足したのか、大岩元総理は笑顔で頷いて、警護車に乗り込んだ。紫峰もその車の助手席に乗り込んで、気づかれないようにため息をつく。

もし美佳に本気で会いたいと言われても、きつと会わせはしない。紫峰は女好きの大岩を、好色爺と心の中ののしりながら、進行方向を見る。

これが終わったら、美佳と過ごせる。紫峰はそう思いながら、仕事に集中した。

3

丁度夕食を作り終えたところで、ドアが開く音がした。紫峰が帰ってきたのだと思い、美佳はコンロの火を消して玄関に出迎えに行く。

「お帰りなさい」

いつもより帰りが早かった。午後六時半をまわったくらいだから、かなり早い方だ。

今日は早く帰ってくるという、予告通りだった。

「ただいま」

紫峰のカバンをその手から受け取り、美佳はもう一度お帰りなさい、と言った。そうしたら再度、美佳の手からカバンを奪って、紫峰が床に置く。じつと見つめられて、そのまま壁に身体を押しつけられる。いきなりの出来事に、美佳は瞬きをして紫峰を見た。一瞬言葉を忘れて、大きく息を吸い込んだ。紫峰のあまりに性急な動きに、美佳は反応できずすがままになる。

「紫峰さん？」

もう一度瞬きをして紫峰を見ると、いきなりキスされた。目を開いたままだったことに気づき、彼の動きに合わせて、ゆっくりと目を閉じる。それを見計らったかのように、紫峰の舌が口の中に入ってきた。

舌で唇を開かせるようにして、彼の舌がさらに深く侵入する。

いったん唇を離し、上唇をついばむようにして軽く触れられたかと思うと、今度は下唇を同じようにされた。そしてふたたび、美佳の顎に指をかけて上向かせ、深く唇を合わせてくる。

「あ……っんう」

息継ぎとともに甘い声が漏れる。紫峰からは熱くて忙しない呼吸を感じた。

強く唇を重ねられて、美佳の意識はだんだんと心地よく薄れていく。紫峰の大きな手が美佳の胸を包む。余裕のないキスとは裏腹に、紫峰の手は優しく柔らかに上下する。

「ん……んっ」

どうにも身体に力が入らず、ズルズルと壁をつたって、腰が地に着いた。それに合わせるように、紫峰も膝をつく。濡れた音を立てて唇が離れると、紫峰が美佳を見つめていた。次の瞬間、唇を唇で挟むような短いキスをされ、ゆっくりと首筋をつたって紫峰の顔が胸に埋められる。

「あ……」

どうしたの？ と言いたかったけれど、息が詰まって言葉が出なかった。紫峰が触れるたびに、翻弄されて言葉が紡げなくなっていく。

なにかを言う暇もなく、また唇が重ねられて、今度はスカートの中に手が入ってきた。太腿を撫でながら大きな手が身体の中心へ向かう。美佳の足を開かせ、その足の間に紫峰は身体を入れた。ショーツのゴムに手を掛けて、ズルリと下ろされる。片方の足にショーツを残したまま、紫峰がさらに美佳の足を開いた。

エプロンもつけたまま、下だけ脱がされて、ただ紫峰を出迎えただけなのに、どうし

てこんなことになったのか。嫌だとは言わないけれど、玄関じゃなくても、と思う。紫峰はこんなふうに身体を求める人だったのか、と少しだけ意外に思いながら熱いキスを受けた。

荒々しく胸を揉む仕草に、性急さを感じる。まるで美佳に触れるのを我慢していたようだ。

「美佳……」

ため息のような切ない声で、紫峰が美佳を呼んだ。それ以外はなにも言わず、美佳の足をさらに開いて、深いキスを続けながら、胸を揉み上げる。内腿に手を這わせて、そこを何度か撫でる。紫峰の息はすでに上がっていた。

それに同調するように、美佳の息も上がっていたけれど、紫峰の性急さに、まだ心がついていけない。

キスをされながら、身体の隙間に紫峰の指が入ってきて、下半身だけ愛撫される。初めは浅く突っただけだった指が、中のほうに入り込むと、思わずのけぞってしまった。

「紫峰さん……あ、あっ」

紫峰の長い指が何度も美佳の中を行き来して、敏感な部分に触れてくる。

一度指が離れたところで、美佳が一息ついて紫峰を見上げると、彼は上着を脱いでい

た。ネクタイを緩めて、シャツをスラックスから引つ張り出す。それから再度深くキスをされて、ゆっくりと床に身体を横たえられる。唇が離れると、スラックスのベルトを外しているような音が聞こえた。美佳からは、身につけているエプロンの陰になってよく見えない。紫峰は手早くカバンを片手で開けて、箱をとり出した。その中身がなんなのかは、美佳にもよくわかつている。

「ここですか？」

思った通り、四角いパッケージが箱から出てきて、それを紫峰が口で噛み切る。

「ごめん、我慢できない」

少しだけかすれた低い声が、余裕がないことを示していた。結婚して三週間、紫峰とはたった二度しか抱き合ったことはない。準備ができたのか、紫峰の硬い自身が、美佳の十分に蕩けた隙間に軽くあてがわれる。そのままゆっくりと美佳の隙間を埋めていく。結婚前に抱かれたときは、久しぶりの行為とその質量で、少しだけ痛かった。今は痛くないけれど、その質量には思わず腰が引ける。

「腰を引いたら、深く入れない」

言われて美佳は身体のを抜く。紫峰の手が美佳の頬を包んで見つめ合う。

「痛い？」

痛くないので首を振る。それを見て、紫峰はにこりと笑って、美佳の足を抱えた。

「あ、あつ……つ」

美佳の隙間がすべて紫峰で埋まる。

玄関の鍵を締めたかを、確かめる余裕もなかった。少し不安を感じたが、腰を揺すられて、一番奥へと紫峰が進むと、もうなにも考えられなかった。

「はあ……」

満足気に吐き出された紫峰の息が熱い。エプロンを捲り上げて、繋がった箇所を指でなぞられる。軽く押すように腰を動かされると、とたんに熱いものが内から込み上げてきた。

「美佳」

大腿から腰骨辺りまでを撫でるように、紫峰の手が上ってくる。スカートはもう下半身を一切隠すことなく、すべて捲り上げられていた。美佳には繋がっている場所が見えないけれど、紫峰にはきつと見えていることだろう。美佳は急に恥ずかしくなって、身を振った。その振動で、どうにもならない快感が腹部から上ってくる。

「美佳、動くよ」

「あう……」

紫峰が美佳の腰を緩やかに揺らし、ときどき強く突き上げる。何度か繰り返すうちに、その動きが速くなる。

「美佳、……っ」

「あ、あ、あっ」

変な声が出て、恥ずかしくなって口を閉じる。耐えるように、切れ切れに息を吐く。

「声、出して」

低い声が耳に響いて、美佳は首を横に振った。

「変、な声、だから……っ」

玄関でこんなことをしたのは初めてで、思わず声が漏れるのをとめられない。いや、それ以前に過去の恋人としていたときにこんな声を出したことがあっただろうか？

「いいっていうんだ。もっと出して、美佳」

腰を揺らす速度がさらに速くなり、終わりが近いことがわかる。

終わりが近くなってもこっちがイかないと、イってくれない。

きっとほんの少しの時間しか繋がっていないのに、美佳は早くいきたくてたまらなかつた。

「紫峰、さん、も……だめ……っ、あう」

「もう?」

意地悪く言って、腰をまわされる。それだけでももうダメで、美佳は紫峰のシャツを掴む。

「……ね、がい。いきたい、イかせて……っ」

「しよがないな……っ。次は、僕のようにさせてね」

美佳は首だけで頷いた。それを見て紫峰は満足そうに笑い、美佳にキスをした。

上半身はほとんど触れられていない。本当に下半身だけ繋がった、動物みたいな行為。だけど、久しぶりの身体はそれを悦んでいた。

美佳の要望どおり、紫峰の腰のピッチが速くなる。それに伴ってあられもない声が出てしまい、恥ずかしくて目をつむる。キスをしていた唇が離れる。美佳が目を開けるとその唇が唾液の糸を引いていた。

「んっ、ああ……!」

「美佳、……っ」

ひととき強く腰を突き上げられて、動きがとまった。

快感が強くて、息が整わない。苦しくて、喘ぐように息をしていると、そこへ柔らかな唇が軽く当てられる。何度も繰り返される羽のようなキスを、美佳はうつろな目で受

けていた。

「美佳、ごめん、こんなところで」

紫峰が身体を離し、少しだけ腰を揺らしてから、繋がりを解いた。

美佳の額に額をつけて、頬が少しだけ触れ合う。

「ごめん、我慢できなかった」

謝りながらも、近くにある紫峰の顔は満足そうだった。心も身体も満たされたような、そんな表情をしている。

美佳の隙間に、あまりにもピッタリと入っていたそれが抜けると、思わず切ないため息が漏れた。紫峰の身体が完全に離れても、美佳は余韻で起き上がれなかった。足を閉じるとか、そういうことさえもできないくらい、快感が続いている。

紫峰の髪をかき上げる仕草と、ストラックスの間から見える、下着とシャツの着崩れた具合が、どうにも情事の後を意識させた。

どうにか起き上がって、開いたままだった足を閉じる。が、上手く閉じられない。左足のくるぶしに引っかかっているショーツが、とても恥ずかしかった。足の間は少しだけ気持ち悪かったけれど、愛された箇所はまだ、その感触が残っていて不思議と満ち足りた気分だった。

「背中、痛くない？」

紫峰の大きな手が、背中を優しく撫でる。

「大丈夫」

「……そう、よかった」

安堵したような表情を浮かべて紫峰は美佳を見る。そしてストラックスのファスナーだけを上げると、そのまま立ち上がった。どう見ても卑猥な感じがする紫峰の下半身。先ほどまで美佳を愛した場所は、服の中に納まっている。シャツがはだけた部分からは、キレイなくらい筋肉がついた腹部が見えている。

こんな場所で、帰ってくるなり抱き合うなんて。待ちきれないくらい、美佳としたかったのだろうか。

「立てる？ 風呂沸いてるんだろう？」

いつも紫峰がすぐに風呂に入れるよう、きちんと準備している。帰りが遅いときは温め直しが必要になってしまうが、風呂に入って疲れをとってほしいと思うから。美佳が頷くと、身体がヒョイツと浮き上がる。

「紫峰さん、なに!？」

いきなりの出来事に驚く。きっと自分は重いだろうと焦る美佳に対して、難なく抱き

上げた紫峰は余裕顔。

「重くない？」

「ぜんぜん。それより風呂、一緒に入ろう」

夫婦は一緒にお風呂に入るものというけれど、生まれてこのかた、二十九年、男性とお風呂なんて入ったことがない。おまけに、紫峰と抱き合ったのは今日で三回目。身体を見られるのもまだ恥ずかしいのに。

「あの、紫峰さん先に入って。私は後から」

「二人で入ったほうが経済的だろう？」

確かにそうですが、と美佳は心の中で呟いた。浴室に行き着き、腕から降ろされる。

これから一緒に入るのだと思うと、恥ずかしい気持ちもあるが、今は濡れたままの下半身をどうにかしたい気持ちのほうが強い。気をとり直して紫峰を見上げる。

「ごめんなさい、重たかったでしょ」

もう一度美佳がそう言うと、苦笑しながら紫峰は首を振る。

「重くないって」

美佳のエプロンが素早く外される。紫峰は自分のネクタイを解いて、美佳のスカートの方をファスナーを下ろしながら、自分のシャツのボタンを片手で器用に外していく。紫峰

はきっと他の女性とお風呂に入ったことがあるのだろうか、と想像した。

「美佳を抱き上げられないほど、非力じゃないよ」

スカートを取りさらされ、紫峰もシャツを脱ぐ。上着を脱がそうとした彼の手をとめて、美佳は自分で脱いだ。紫峰に背を向けると、脱衣所においてあるカゴに入れる。うしろでベルトをはずして、ストラップスを脱ぐ気配がある。それを見ないようにしていると、紫峰にブラジャーのホックを外された。慣れた動作で片腕ずつ紐をとる。

裸になった美佳の背中に大きな手が這って、首筋に唇が当てられる。その行為に肩がすくむ。紫峰は浴室のドアを開けて、そのまま美佳を導いた。

「入って、美佳」

浴室に入ると、まだ沸いたばかりの風呂が湯気を立てていた。フタをするのを忘れていたが、こうなればそのままになってよかつたと思う。後から紫峰が入ってきて、シャワーのコックをひねる。温度を確認しながら、風呂においてある椅子に腰掛けるよと言われた。

恥ずかしい思いをしながら美佳が座ると、こつちを向いてと言われ、紫峰の方を向く。紫峰は美佳の前に胡坐をかいて座っていて、下半身にはタオルがかけられていた。

タオルを手にとつて、ボディシャンプーを泡立てる。なにをするのか、と思つたら美

佳の左腕をとって、泡立ったタオルを滑らせた。手を引きたいが、なんとなくそれができない。紫峰は他の誰かもこうやって洗ってやったことがあるのだろうか。慣れた動作が、それを思わせる。

「紫峰さん、あの……」

居心地の悪さが勝って、声をかけた。恥ずかしさもあるから、美佳は自分で身体を洗いたかった。

「なに？」

「自分で洗うから。こうやってお風呂に入るの、恥ずかしいし」

美佳は、思わず自分の身体をもう片方の手で隠した。けれど、その手もとられて、両腕を紫峰の大きな手で広げられる。なにも隠せない状態になるのは、心もとない。紫峰は余裕の表情で、にこりと笑って見せた。

「僕も恥ずかしい、美佳ほどじゃないけど」

「うそ」

「本当。だからタオルをかけてる。興奮した自分を直に見られるのは恥ずかしい」

言われて美佳は、紫峰の下半身にかけてあるタオルを見る。その下が、興奮しているかは、わからない。

「興奮なんて」

ウソよ、と言うように美佳が首を振ると、紫峰はため息をついて美佳を見た。

「する。少なくとも、美佳を見て玄関で襲うほどには」

赤面するような台詞を言った後、たつぷり泡立ったタオルで美佳を再度洗い始める。

美佳の左胸をタオルが滑り、脇の下も洗われる。反対側も同じようにされた。洗っていた手がとまり、紫峰が美佳を見る。

「嫌ならやめるけど」

目の前の紫峰は、引き締まった男らしい身体つきをしている。胸板が厚く、腕も腹も贅肉なんてない。美佳のたるんだ腹部や、年齢とともに垂れてくる胸とは大違いだ。

「恥ずかしいのは、私の身体がそんなにキレイじゃないから。胸なんか垂れてきてるし」

美佳が自由になった手で胸を隠すと、その手をとって紫峰は微笑んだ。

「僕は美佳の身体が好きだ。下がってくるのが嫌なら、僕が毎日揉み上げてもいい」

思わず紫峰の腕を叩く。美佳の行動に紫峰は笑って、酷いな、と返す。叩いた紫峰の腕は、やはり無駄なく引き締まっていて、美佳は自分の身体が恥ずかしくなった。

「揉み上げるなんて、して欲しくない」

そう？　と言って、美佳の足を持ち上げると、丁寧に下腿から大腿まで洗われる。た

くさんの泡で包まれた自身の足を、太いなど眺めながら、この人はどうしてこんなに大事に扱ってくれるんだろうと不思議に思う。

二十九歳だから、後もないから、という気持ちが強くて結婚した。雰囲気合った紳士的な態度に好感が持てたし、紫峰のことは嫌いじゃなかった。会う度に熱烈に愛をささやかれ、悪い気がしないどころか、その熱い気持ちに引き寄せられた。

紫峰のことだから、きっと美佳の焦る気持ちを知っていて結婚を決めたのではないだろうか。結婚して一緒に暮らして知ったのだが、彼はすごく勘がいい。だからきっと、美佳の心中を察してくれたに違いない。

「うしろを向いて」

両足を洗い終えて、うしろを向くと、タオルで背中を洗ってくれた。力加減が気持ちよくて、思わず前かがみになってしまう。

「背中、青くなってる。痛くない？」

押されると少し痛みがあった。背中を中心辺りがきつと打ち身のように青くなっているのだろう。

「押すと痛い」

「ごめん。もう床でしないから」

本当にすまなさそうな声が、美佳の耳にダイレクトに届いた。

「美佳、きちんと座って」

苦笑して、うしろから身体を起こされる。大きな手が胸の上を滑って、思わず息をとめた。丁度良い熱さのシャワーをかけられて、泡が流れていく。そのまま頭にもシャワーをかけられ、すぐにシャンプーをされる。人に頭を洗ってもらうことなんて、美容室でしかないのです、それも心地よかった。

「はい、終わり」

軽く髪の毛を絞り、湯船に入るよう促される。言われるままに湯船につかると、紫峰は自分で身体を洗います。その様子を眺めていたら、目が合いそうになって咄嗟に目を逸らした。

さっさと洗い終えた紫峰も、同じように湯船に入ってきた。美佳は足を縮めて、場所を空けた。手を引き寄せられ、うしろから抱きしめられる。美佳の身体は紫峰の腕の中に納まった。腰に腕がまわって、本当にラブラブなカップルみたいな格好になる。なにがどうしてこんなに愛されるのか、とますますわからなくなる。

「紫峰さん、私のどこが好きなの？」

私は普通だよ、どこにでもいるような人だよ、と美佳は心の中で呟いた。ここまで大

事に扱って、おまけに玄関で動物みたいに盛るような愛し方をしたくなるほどの魅力が、自分にあるとは思えない。

「美佳といると、しつくりくるんだ。ずっと側にいたい感じがする。どこが聞かれても、すべてだから答えられない」

髪の毛を耳にかけて、首筋に口づけられる。

「いつも、同じことを聞かれるけど、君はどうなんだ、美佳。僕のどこが好き？」

たしかに美佳は聞いてばかり。そして言葉は違うが、紫峰はいつも同じように答える。「私を、大事にしてくれるところ。出会ってから結婚までかなり短い期間だったのに、どうしてこんなに大事にしてくれるのか、っていつも不思議に思う」

美佳がそう言うのと、紫峰は少しだけ笑って、美佳の身体を両腕で抱きしめた。

「好きな人は大事にしたい、それだけ。美佳は僕のこと、信じてくれないわけ？」

「信じてるけど、ここまでされたことがないっていうか」

そう言うのをとられて、うしろを向かされる。唇に柔らかい紫峰の唇が寄せられる。ついでにキスをされて、舌がゆっくりと入ってくる。けれど、深くなっていくかと思ったキスは、すぐに終わってしまった。

「美佳は、僕に大事にされるために生まれてきたんだと思う。きつとね」

優しく笑うその顔に、どうしようもなくドキドキした。抱きしめられているから、きつとこの鼓動は伝わってしまっているだろう。ここまで言ってくれる人は、きつとこれから先にも現れないだろうと思う。

「美佳、今日は安全日？」

「え？」

言葉の意味がわからず、首を傾げた。すると紫峰が耳に唇を寄せて、とんでもないことをささやいた。美佳にとってはとんでもないことだが、紫峰にとっては大したことではないのかもしれない。

「今日は大丈夫だと思うけど、でも、あの……」

ためらうようにうしろを振り向くと、そのままキスをされる。唇をついばむようにゆっくりと動いた紫峰の舌が、先のほうだけ美佳の口の中に入ってきて口内を愛撫する。美佳は唇と唇の隙間から息を吸うが、最後に深く唇を重ねられて苦しくなった。

「しちゃダメ？ 美佳……」

そう言うってまた深く唇を重ねる。うしろから紫峰に抱きしめられた体勢で、このままキスを続けるのは少しきつい。彼の腕に触れて、美佳から唇を離す。このままの体勢だと、うしろから抱かれることになりそうだと、と思った。美佳はうしろから抱かれるの

があまり好きではない。けれど、今日はこのまま紫峰にうしろから抱かれるのもいいかもしれない、とぐるぐる考えていた。

そうして息も絶え絶えになりながら、美佳は紫峰に尋ねる。

「うしろからするの？ それとも前から？」

チャップンと湯が鳴って、下から上に胸を揉まれる。紫峰はすっかりその気になつているようで、唇が美佳の首筋を這いだした。

「どっちがいい？」

声とともに、紫峰の唇が耳を撫でるように動く。首をすくめて息を吐きながら、紫峰の腕に触れていた手を移動させて手のひらを重ねた。

「どっちでも、いいですよ……」

優しく胸に触れていた手がとまって、耳元で紫峰が微かに笑う。

「どっちでもいいなら、前からにしよう。美佳の顔が見えるから」

浮力を利用して身体を反転させられる。紫峰の膝ひざの上ののる格好になった。

「それに美佳は、前からの方が好きだよね？」

「そんなこと、言ったことない」

「そう？ 言っているように思えるけど……」

そのまますぐに美佳と繋つながろうとしたので、とっさに手で制したが、それは空しい抵抗だった。腕ごと抱き寄せられて、ゆっくりと紫峰と繋がる。

「あ、あっ」

「正面から抱くと、感じ方が違う」

美佳の隙間に埋め込まれる紫峰はやはり、かなりの質量だった。今まで付き合った人と比べるのも失礼だが、かなり大きさが違う。入ってすぐは苦しいが、すぐに慣れて快感に変わる。自分が感じているのを見られるのは、恥ずかしくてたまらない。

「そんなの、違、う……っ」

「そうかな……？ 美佳、少し緩めて。きつい」

紫峰が美佳の身体を揺すり始める。水の音がやけに大きく響いて、それだけで美佳の身体は感じてしまう。美佳の中を行き来する紫峰の感覚に、こらえきれない声が少しずつ漏れる。

「できない、よ」

緩めるとか、どうやってするかわからない。紫峰はいつもこんな要求をする。けれど、美佳は男性経験が豊富なわけではないから、そう言われても困ってしまう。

「毎回、慣れないな、美佳」

紫峰が身体を持ち上げるように動かした。それだけでまた快感の波が押し寄せ、濡れた声を上げてしまう。紫峰の首に手をまわし、紫峰の体幹を両足で締めつける。

「痛くない？」

一度揺するのをやめて、紫峰が美佳の背中を撫でる。

「だい、じょうぶ。……紫峰……さ……っ、んんっ」

美佳がそう言うのと、ゆっくりと腰を動かしながら首筋に舌を這わせる。首筋を撫でていた柔らかい舌が、鎖骨へと移っていく。それから大きな手が美佳の胸を揉み上げて、先端を口に含みながら、もう片方の手で腰を強く引き寄せる。

「……っん……っあ」

紫峰の口が美佳の胸から離れて、顎を軽く食んだあと、唇に行きつく。ついでむようなキスを交わし、紫峰がため息のような息をつく。

「気持ちいい」

唇を少し舐めながらそう言う姿は、視覚的に色っぽい。

「美佳は？」

そんなこと聞かなくてもわかっているじゃない、と思いつながら、美佳は紫峰の首筋に顔を埋める。みずから腰を少しだけ動かすと、かすかに紫峰が笑った。

美佳の動きに応えるように紫峰が動く。湯の浮力で簡単に身体が持ち上がるからか、下から何度も強く揺らされた。美佳は風呂でなんて抱き合ったことはなかったし、こんなに気持ちよくなって濡れた声を出したこともなかった。

けれど紫峰はきつと風呂で抱き合ったことがあるのだろう。ここまでの経緯にどうにも慣れた感じが否めない。そしてふと我に返って思うこと。紫峰には結婚直前まで、付き合っている人がいたことだ。嘘はつきたくないから、と正直に結婚前に告白された。さちんと別れて美佳と結婚するのだと、そう言った。実際、美佳と付き合い始めてから、他の女性の影を感じたことはまったくない。

『ナカムラトウコっていうんだよ、美佳ちゃん。美人でスタイルが良くて、階級も俺らより上なんだ』

紫峰の友人を問い詰めて教えてもらった紫峰の元彼女。

「美佳？」

耳に届く、低く甘い声。いつもと声色が違うのは、紫峰が美佳で感じているからだ。乱れた髪を耳にかけられて、首を引き寄せられる。

「余裕あるな。考えごと？　こんなにゆっくりじゃなくてもいいのかな？」

勘がいい紫峰には、美佳が集中していないことなどお見通しだったようだ。首を捕ま

えられたまま、緩く腰を揺らされる。片方の腕は美佳の腰を固定していたが、首にまわされていた手が這うように上がってきて美佳の顎をとらえた。

「口、開けて」

言われるままに口を開くと、そのまま噛みつかれるようにキスをされた。唇を痛いくらい吸われて、腰を突き上げるように動かされる。

キスをしながら強く動かされるので、息がつかなくなる。息継ぎをしても酸素が足りなくて、目の前がチカチカする。紫峰の抱き方はいつも情熱的で、そして丁寧だ。

まるで美佳の中には紫峰が初めからいるような、そんな緩く甘い快感をずっと与えられている。

さっきまで頭の片隅にあった、ナカムラトウコの名前もなにも考えられなくなった。

「も、無理……む、り……ダメ……っ！」

身体の中をかきまわされるような感覚。言葉という言葉は、まったく意味をなさなくなり、紫峰が美佳を呼ぶのも、どこか遠いものに感じた。

「なにがダメ……っ？」

紫峰は意地悪だ。忙しなく息をする美佳を見て、同じように忙しなく息を吐きながらも微かに笑う。

「いじ、わる……っん」

「それは美佳だろ？ いつも狭くて、耐久力を試されているみたいだ」

紫峰は美佳の頬に唇を寄せて、後頭部に手をまわす。もう片方の手は腰を抱き寄せて、強く腰を動かしている。

「……っあ、あー！」

「……美佳」

小さく呻いて、一度動きをとめてから、わずかに腰を揺らす。紫峰の腰の動きがとまると、美佳は自分の身体の中に熱いものが広がるのを感じた。

「しほ、さん……」

美佳が紫峰の名を呼ぶと、優しく背を撫でられた。

紫峰が美佳の中で果てるのは初めてだった。今までよりも紫峰を身近に感じる。

「中で出したけど、嫌だった？」

呼吸を整えながらそう言う紫峰の声を耳元で聞いて、美佳は首を横に振る。

本来なら子供をつくる行為。中で受け入れたら、妊娠する確率が高い。紫峰は美佳とそうなるのも構わないと思っただけだと、それだけ美佳との未来を考えているのだと思えた。

「今度は、ベッドで抱いて……紫峰さん。ゴムはしなくていいから」

「もちろんそうするつもり」

紫峰はキスをして身体の繋がりを解く。美佳の中にいた紫峰がいなくなると、言いようのない喪失感を感じた。

「なにも着けない方が、美佳の中を感じられてよかった。本当によかったよ」

紫峰の言葉に顔が熱くなるのを感じて、美佳は湯船から上がる。シャワーを軽く浴びて、紫峰の視線を感じながら、そのまま浴室を出た。

紫峰も風呂から上がり、タオルを巻いたままベッドへ行く。

ベッドの上でゆっくりと抱き合って、避妊なんかしないで紫峰を受け入れた。

やっと本当の夫婦の営みをしたような気がする。

この日、美佳は初めて紫峰のすべてを受け入れたような気がした。

4

美佳の中に自身を解放して、その背中を撫でていた紫峰は、久しぶりにした美佳との行為を反芻はんすうしていた。

どうしてこんなに好きになったのか、と思いつながら、美佳と出会ったときのことを思い出す。

美佳と会う前日、紫峰は当時付き合っていた彼女と会い、ホテルで食事をした。そして、その彼女のために、ホテルの部屋をとっていた。もちろん、目的は抱き合うこと。久しぶりに会ったその人と、抱き合うのは自然なことだった。男と女が付き合う過程で、その行為は当たり前だと思っていた。

紫峰はその人と結婚を考えていた。愛しているとか、そういう感情は抜きにして、二年間付き合ってきた同い年の彼女とは、そうするのが自然なことだと思えた。

なのに、美佳と会ったその日に、彼女よりも美佳とずっといたい気分になった。なぜか、自分はこの人と結婚すると、直感的に思ったのだ。付き合っている彼女との結婚生

活は想像できなかったのに、美佳との結婚生活はなぜだか簡単に想像できた。

美佳と初めて会った見合いの日のことを思い出しながら、美佳の身体を抱きしめる。

紫峰は見合いの日、大きな失態をした。それは決して許されることではなく、本来ならば美佳が怒って当然という類のものだった。けれど美佳は今こうして自分の腕の中にいる。自分の隣に美佳がいるこの幸福は、紫峰が見合いをすると決めた瞬間から始まっていたのだ――

「今日一日で、最高何回できるか試してみない？」って言ったこともあったわよね、ミカ」
久しぶりに会った彼女は、自分が覚えていないフレーズを言い出した。彼女の名は中村瞳子。警察官のキャリア組。

「そうだったけ？」

「そうよ。ミカってば、すぐ忘れる。結局どれくらいしたっけ？」

「覚えてないけど」

紫峰の返答に、瞳子は不満そうな顔をしたため息をついたが、目の前の料理が美味しかったためか、さほど怒っていないようだ。彼女がホテルで夕食を食べたいと言っていたから、紫峰は今日のために一週間前から予約を入れていた。

「明日は何時から？」

首を傾げて聞く瞳子には、仕事するときには見せない愛嬌がある。紫峰はそういうところが好きだった。

「非番だよ」

「私も。今日はゆっくりできるね」

「僕はゆっくりできない。明日は見合いだ」

「え？ お見合い？」

ワインを口に運んで、目の前の彼女を見る。紫峰はそうだけど、と素っ気なく答えてナイフとフォークを再度手にとった。気のない話し方になったのは、その見合いを苦々しく思っているからだ。

見合いを勧められたとき、父には、付き合っている彼女がいる、と言った。が、父は兄と弟が結婚していて、次男の紫峰が結婚していないことに対して思うところがあつたらしい。彼女がいても結婚しないのなら、一度その人と会え、と強く言われたのだ。

「断れなくて。しょうがないから一度会ってくる」

紫峰は悪いとは思いますが、恋人に真実を話した。

本当に気は進まないけれど、それでも会わなかったら父もそして母も黙ってはいない

だろう、と感じていた。

「……そう。……ねえ、私とのこと、考えている?」

互いに三十六歳。結婚をしていて子どもがいたっておかしくない。だが、彼女は上昇志向も強く、女ながらに異例のスピードで警視まで昇進していて、仕事を優先していた。「考えているよ、瞳子。ただ、会うだけだ」

「本当に?」

「でなきゃ前日に瞳子と会ったりしない。上に部屋もとってるんだ」

瞳子はやつとホツとしたような表情を見せて、にこりと紫峰に笑いかけた。普段気が強いが、紫峰の前では女の顔になる。そのときの瞳子は可愛げがあった。スタイルもいし、美人なところが紫峰は気に入っている。紫峰のことを名前で呼ばず、苗字の三ヶ鳴から取って「ミカ」と呼ぶところも可愛い。

「今日一日で、最高何回できるか試してみる?」

瞳子の言葉を借りて紫峰が言うのと、瞳子ははにかんだ。

「明日、大丈夫なの?」

「大丈夫。本当に会うだけだから」

紫峰は余裕の笑みを見せた。

気持ち揺らぐことなんてない。紫峰は二年付き合ってきた、このキレイで可愛いところのある瞳子と、本当に結婚を意識しているから。

「嬉しい、ミカ」

料理は途中だったけれど、そんなものは互いにどうでもよくなって、中断して予約しである部屋へ行った。

シャワーも浴びずに、すぐに抱き合ってキスをする。瞳子の細くて長い足が紫峰の足に絡まるのは、かなり扇情的だった。そこまではよかったのに、耐えるように瞳子の足が紫峰の腰を強く挟んだ瞬間、腰に固い膝が当たった。痛くて、気持ちやや冷めてしまった。萎えることはなかったが、紫峰はなかなかイけなかった。

結局たった一回の行為で、瞳子はぐったりしてしまった。きつと仕事の疲れもあったのだろう。そのままシャワーも浴びずに寝てしまった。紫峰にとって今日の行為は達することほできても疲れただけで、軽くシャワーを浴びてそのまま眠りについた。

翌朝、鈍い頭を振りながら、チェックを済ませてひと足先にホテルを出た。出がけに、部屋の中にいた瞳子に、また連絡するから、と言って軽く手を振り、ドアを閉めた。

「なにをしているんだか」

家に帰ってもう一度シャワーを浴びて、そしてスーツを着替えて、と段取りを考える

だけで頭が痛かった。

このときの紫峰は、もう少しで運命の人が現れるとは、まったく思いもしていなかった。

5

見合いの場所であるホテルに着くとすぐに、紫峰の姿を認めた父親から声をかけられた。

「早いな紫峰。いつもお前は遅刻しない」

笑みを浮かべて頷く父に、当たり前だ、と返した。

「したらいけないでしょ。ゴリ押しして見合いを勧めたのは誰？」

紫峰の父、三ヶ嶋峰生が勧めた見合いの相手は、峰生が昔世話になって以降、ずっと交流があった警察官の娘だった。会うだけでも会ってみろ、と再三言われて承諾したのを、父は忘れていているらしい。

本当は、昨日瞳子と会うつもりはなかった。だが、二週間以上会っていないなかったので、瞳子がどうしても会いたいと言いつ出した。瞳子と会うのなら、寝たい。瞳子を不安にさ

せたくはなかったけれど、次の日の見合いのことを話すことになるだろうというのは予想がついていた。自分と抱き合った翌日に見合いに出かけるなんて、ひどいと思われることも承知の上だった。溜まっていた性欲を発散させたい気持ちが強かったのだ。

それに、今回の見合いは、ただ一度会うだけだと高を括っていた。昨日の行為で多少疲れているが、別にどうでもよかった。どうせ、先方から断りが入って終わりだと、そう思った。

今日の見合いはそういうものだ、と。

「いい娘さんだよ。断るとしたらかなり惜しいが、単なるきつかけだと思つて会え」

紫峰は三人兄弟の二番目だ。三歳上の兄の峰隆はすでに結婚していて、子どもが二人いる。そして三歳下の弟の峰迅にも、一人子どもがいる。二人とも二十代半ばで結婚した。父と母からいつも言われるのは、良い人はいないか、ということ。兄と弟は警察のキャリア組。紫峰だけノンキャリアだからなのか心配しているようだ。

「……どんな人？ 写真も見えないけど？」

写真がある、と電話で言われていたが、忙しくて見る暇がなかった。父から可愛い人だ、と言われているので、容姿は悪いわけではないのだろう、と想像している。

「堤美佳さんという人だ」

「名前は聞いたよ」

うんざりしながら紫峰は言った。都知事の旅行に付き添い、やっと昨日帰ってきたばかりだ。そしてその夜、瞳子と会って食事とセックス。疲れはかなり限界にきていた。

「SPは忙しいか？」

「やりがいはあるけどね。ただVIPと旅行に行くのと、疲れるかな」

峰生はにこりと笑い、先方はもう来ているから、と紫峰を促した。

峰生の隣に並んで歩く。峰生は紫峰の仕事になにも口を出さない。兄や弟に対してもそうだが、とくに紫峰にはなにも言わなかった。兄と弟とは別のノンキャリアの道を紫峰が選んだことを、父は喜んだ。やりたいだけ頑張れ、と応援してくれた。

堤美佳さんはな、結構な才女だぞ。フランスとアメリカに留学して、翻訳家になっているし、それだけではなく小説家としても活躍しているそうだ。おまけに華道と茶道の名取。自立した女性だ。たぶんお前より収入が多いと思うぞ」

「へえ、それはすごい」

すごいと口では言いながらも、そこまですごいと思っていない。仮に結婚したとしても、養ってやる必要はないわけだ、と毒づいたにすぎない。どうせ家にこもっているような女、オタクに決まっている。そんな人と、性格が合うわけない。もしかしたら性生活の不

立ち読みサンプルはここまで

一致もあり得るかもしれない、と下世話なことにまで思いを巡らせる。とにかく、父の言う堤美佳は、紫峰の好みから外れている。紫峰は自分をすっかり持った、洗練された女性が好みだから。

「お父さん、ちょっとトイレに行くから、先に行って」

「わかった。待ってるぞ」

別に用を足したいわけではなかったが、会いたくない気持ちが増し、対面を少しでも先延ばししたかった。洗面所で手を洗っていたら、首筋に赤い痕があることに気づいた。ネクタイを締めるとき、よく鏡を見なかったため、今まで気づかなかった。

「これくらいなら大丈夫か」

首を傾げなければキスマークは見えない。紫峰はそのまま、トイレを出た。

直後に、誰かとぶつかった。

「あっ！」

「すみません」

そこにいたのは着物姿の女性。その拍子に彼女のかんざしがシャランと音を立てて落ちた。赤い着物に、赤い牡丹の花かんざし。金属の飾りが控えめに下がったそのかんざしを見て、趣味がいいな、と思った。紫峰はそれを拾い上げる。